何らかの挫折体験によって、その不安から身を守るために自分の殻の中にこもってしまうと考えられるということです。

小泉英二氏は登校拒否の心理機制を、親からの「心理的独立への葛藤」としてとらえています。子どもたちはある時期（多くは思春期）になって、ある程度自我が成熟してきて、親からの独立を求めるようになり、そこで特に「優等生の挫折」的な神経症的不登校の場合などは「学校に行かない」ということで親に反抗します。しかし現実の自己はまだ弱く、家出したりして独立する力はない。そこで家に閉じこもるという形で親に依存するということになります。そのように「自立と依存の葛藤」という形が主要なメカニズムというわけです。

そのほかに人間関係からみる考え方もあります。不登校も基本的には人間と人間のかかわりあいが関係しています。我々は誰しも、他の人から認められたい、わかってもらいたい、愛されたいという気持ちを持っています。それが十分満たされないとき、寂しさや孤独感といったものを抱くわけで、これが不登校につながると考えます。

まだその他にも様々な考え方がありますが、子どもたちの発達という視点に立って考えると、不登校は発達の危機、成長の分岐点といえます。しかし、子どもたちの発達・成長は一人一人異なるものであり、個を大切にする立場に立つなら、その発達の速さの違いをふまえての適切なかかわりが大切になります。河合隼雄氏は、教育という文字には、「教える」、「育てる」、「育つ」という意味が含まれ、「教える」内容が知的なことではなく、生き方全体にかかわること、生徒指導ということでは「育てる」「育つ」の意味が重要になってくると言っています。教師はともすると、「教える」ことに熱中し、「育てる」こと、自己教育力ともいえる「育つ」力を忘れがちです。不登校の子どもたちとかかわるときにも、自己治癒力ともいうべき「育つ」力を信じて、教え込むのではなく見守って行く姿勢が大切になることも忘れてはなりません。

2　学校における援助・指導の実際

(1)　学校の指導体制

子どもが不登校の状態になったとき、学校としては担任まかせにせず、全教職員が不登校の問題について十分に理解を深め、共通の認識にたち、適切に援助・指導していく必要があります。

ア　全教職員の不登校への理解

学校の対応では、先生方が不登校の子どもに関してどれだけ理解を深めているかが大切になってきます。

その方法のひとつとして事例研究の有効性が認識されています。事例研究では一人の子どもの心の世界を様々な角度から検討し、心に起こっていることの意味を深めていくことによって、指導・援助の方法を探ります。また、このことは先生どうしの相互理解を促すとともに、先生一人一人がその子どもをどれだけ理解しているか、その深さを知り、自分の人間観、人生観、教育観を見直す機会にもなります。関係機関の相談員など、不登校の子どもに接してきた経験の豊富な専門家を招いてスーパーバイズの機会を持つのもよいでしょう。事例研究で大切なのは一人の子どもの心に起こっている様々な事をいろいろな視点から共に考えていくという姿勢なのです。

事例研究の他に、不登校の子どもに接してきた経験を豊富に持っている様々な立場の専門家を招いて、体験談やその体験に裏付けられた考えを聞き、それについて先生方が自由に話し合いをするなど、校内研修をより積極的に行い、全教職員が不登校児童生徒についての理解をそれぞれ深めていくことが、指導・援助の方法を見つけていくことにつながっていきます。

イ　教職員間の連携・協力

不登校児童生徒について理解を深めていくには校内研修ばかりでなく、気軽に情報交換できる雰囲気が先生方の間にあることが大切です。一人の先生が一生懸命にその子どもとかかわりあうことは大切ですが、ともすると自らの判断が一人よがりの判断になりかねない危険性もあります。不登校の子どもとかかわりあっている先生が子どもの実態に応じて、以前からその子と接触のあった先生の協力を求めたり、すでに不登校の子どもの援助・指導の経験のある先生と相談したりするのもよいでしょう。このようなことを自然にできるように、先生は日頃から職場の人間関係を大切にし、教育相談活動以外の場面における人間関係づくり、ネットワークづくりを心がけることが必要です。

ウ　学校でできることの確認

不登校の子どもに対して、学級・ＨＲ担任だけでなく、学校体制の中で様々な先生がかかわりをもち、教育相談の活動が学校の中で機能していることが大切です。

担任が不登校の子どもに対して直接的な援助・指導を行おうとしても、その子どもにはかえってプレッシャーになり家での引きこもりを強くする場合もあるので、慎重に子どもの心の中で起こっていることを考えていかなければなりません。このような場合は、むしろ親への援助・指導が大切です。先生が親の不安やあせりをしっかり受けとめると、親が子どもの見方を変え、子どもへの接し方が変わります。このように、教師は親をとおして子どもにかかわっていくことができるのです。

「保健室なら登校できる」という不登校の子どももいます。そのような子どもにとっては、

保健室という保障された空間に、養護教諭が子どもの心の動きを察知しそれを受けとめる姿勢で常に居ることが、大きな意味をもってくることがあります。保健室登校から教室へ子どもが戻っていく過程においても、担任や学年主任の先生などと相談しながら、あくまでも学校の中で段階的な措置をとっていくことが大切です。学校の中で養護教諭が保健室で果たしていく役割はこれからますます大きくなっていくと思います。

学校における援助・指導の見通しや方針が立ちにくいときは、関係機関と連携を深めていくことが必要です。この場合、関係機関に子どものことを任せきりにするのではなく、時には学校から関係機関へ電話連絡するなどして、子どもや親の状態を確認したり、学校での役割を明確にするなど関係機関との連携を深めていくことが大切です。また、学校の中では、担任や養護教諭をはじめとするそれぞれの先生が、具体的にどのように不登校の子どもとかかわっていくかを互いに連絡・調整していくことが大切です。このように、様々な立場の人が一人の子どもにどのようにかかわっていくのがよいのか、それを調整していくことをコーディネーションといいます。教育相談が機能していくためには、このコーディネーションがこれからますます必要になってくることでしょう。コーディネーションがうまくいくためにも、関係機関の相談員が学校へ援助・指導していくという、いわゆるコンサルテーションという活動がこれからはますます必要とされていくことと思います。

エ　コーディネーター・キーパーソンの確認

不登校の子どもに様々な人（担任、養護教諭、関係機関の相談員、両親など）がかかわっていくときに、そのかかわりかたを連絡・調整していく人がコーディネーターです。関係機関の相談員がかかわっている場合は、コンサルテーションの活動に併行した形で相談員がコーディネーターとなる場合が多くなります。しかし、関係機関と連携せず、学校の中だけのかかわりの場合は、子どもの心の動きやそれにかかわっていく先生・家族の立場や心情などを理解していける人がコーディネーターになる必要があります。

不登校の子どもに直接かかわり、最も子どもの心の状態を理解し受けとめられる人がキーパーソンになります。学校の中では、担任がキーパーソンになる場合が多いでしょう。

学校の中で、誰がコーディネーターになるか、キーパーソンになっていくかを確認することは、不登校の子どもとのかかわりを進めていく決め手になります。

(2)　本人とのかかわり方

ア　基盤となる考え方

子どもたちは、学校に行かないのではなく、行きたいけれど行けないのです。本人にその理由を聞いてもうまく答えられません。

「どうしてだか自分でもわからない。」

「学校がなんだかつまらない。」

こんな言葉しか返ってきません。

家族との葛藤を抱えながらも、自分の生き方を模索するという自立のための苦しみは、自分の内面に生じた変化が意識されないままに現れるのです。このために本人は気づくことができないのです。

ですから理由を答えたとしても、友だちが仲間はずれにするから、いじめるから、勉強がわからなくなったから、先生が嫌いだから、と懸命に一見合理的な理由を見い出そうとします。

あるいは「転校したら学校へ行く。」「○○を買ってくれたら学校へ行く。」などと言ったりします。

こんな言葉を鵜呑みにして望みをかなえるよ

うに努めてもいっこうに登校の気配を見せず、時にはますます要求がエスカレートしたり、欲しいものが手に入らないと暴れたりということが起こったりします。親がこれまで与えてくれなかったものを今欲しがっているのかとさえ思わされます。

過大な要求は何を意味するのでしょうか。子どもたちは欲しいものが手に入ればいいのではないのです。本当に欲しいのは、自分を自立の道に導いてくれる親や先生の真の愛情であり、自分に対する、場合によっては厳しい対決をまじえた親や先生の姿勢なのです。

そのことはまず一人の人間としての子どもの理解にはじまります。その子が大切な個人として存在するのだと受けとめることです。

一人一人の子どもの抱えている問題が違います。現実的に見えている問題から目を離さずにその子の自立を阻んでいる問題が何か、どこにあるのか本質的な部分に検討を加えながら、長い目で温かく家族やその子を見守っていくことが必要です。

イ　内面や背景を理解する

「明日は学校へ行くよ。」と言って親を安心させ元気にしていながら、朝になると頭痛や腹痛を訴えて布団から出て来ず、昼頃になると何事もなかったかのようにパジャマのままでテレビを見たり漫画を見たりしている。こんな姿を見ると、どうしても本人の怠けとしか思えません。

そこで何回も登校を促したり、力ずくでも登校させようと周囲はあせります。このような対応が有効な場合もありますが、「誰も自分をわかってくれない」という不信感を本人が持ち、心の扉を閉ざしてしまって、周囲の者がそのあと心のつながりを持つことが困難になる場合もあります。

大切なのは、学校に行かせることに腐心することではなく、その子の心の奥底にあるものを理解しようとすることです。表面に現れた言動に惑わされず、心の隠れている部分に目を向けることです。

学校での人間関係はどうか、先生や友達にはその子が学校ではどう見えるか、学校のあり方へのその子の主張や願いがあるのか、家族の問題をその子なりにどうとらえているか、成長の課題として何が必要か、見える問題と見えない問題を深くとらえようとすることが大切です。

自分の生き方を探ろうとして立ち往生し、周囲との葛藤も生じて、とまどい、いらだち、悩み苦しんでいることを理解しようとする姿勢なのです。

先生をはじめとする周囲の者が、子どもの内面的成長のチャンスとして不登校をとらえ温かく見つめていく姿勢を示すことで、子どもは心の安定を見い出します。

ウ　信頼関係をつくる

子どもたちは誰かと心のつながりを持ちたいと痛切に思っています。本心は学校に行きたいのですから、この先生には心を許して安心してつきあえると思えれば、心理的に大変安定していきます。そんなふうに人間関係ができたら、定期的に面接を行うことも成長の大きな力となります。

子どもは、面接の中で自分自身の問題について気づいたり、考えたり、見方を変えたりできるようになります。さらに解決の糸口を見つけて自ら行動できるようになります。

子どもとつきあうことで先生もまたその子への見方を変えたり、先生自身を見直すきっかけにもなります。

その意味では、子どもから学ぶという姿勢を大切にしながら、子ども自身の力で一歩一歩進むのを見届けていきたいものです。

ゆっくりとあせらずにこの子の問題とは何か、

どこにあるのか、成長の過程でとらえるとどういった援助を必要とするのか、親と一緒に考えていければよいと思います。その子の真の理解がそこでできるのです。

(3) 親とのかかわり方

ア 基盤となる考え方

不登校の子を抱えた親の混乱や動揺、不安は大きく、親もまた子ども以上に苦しんでいます。先生が親の心情に共感し、寄り添っていくことで、親は安心できます。そして混乱と不安から脱して親自身が子どもとの関係を見直しながら自分も変えていこうとする道すじを歩みだします。

その親に寄り添ってどこまで親を支えていけるかが、援助する側の中心課題といえます。

そのための的確な情報の提供、信頼関係の確立が不可欠のことだといえます。

親は混乱のあまり、学校への不信感を表明したり、先生への批判を繰り返したりする場合もあります。そんな時、面子にこだわって反論したり、自己弁護に終始したりしてしまうと、親と学校が責任のなすりあいをしたり、相互不信に陥ったりして、せっかくの信頼関係をつくるチャンスを失ってしまいます。

まず親の話に耳を傾け、親の悩み、苦しみを理解し、共に歩もうとしていくことが大切なことだと思えます。

イ 家庭訪問のあり方

学校の行う援助・指導では、家庭訪問が重要なものといえますが、あまりに無定見な訪問はかえって子どもや親を苦しめ、信頼関係を損なう恐れも生じます。

家庭訪問は子どもの心に即して行われるべきです。そのことを親にも充分理解してもらうことも必要です。子どもには、「放っておいて欲しいけれど、見放されたくはない」という両価感情があります。したがって子どもの状態にあわせての、好ましい人間関係づくりを第一義とした家庭訪問であってほしいのです。子どもの状態にあわせて一緒に遊ぶことにも意味があります。

親の方では先生が学校に行かせてくれると思っているかも知れませんが、先生は子どもと楽しく遊ぶことの中で人間関係がつくられることに確信をもって、ゆとりをもって接してください。

ウ 家族としての課題を理解する

不登校の問題は家族のうち、誰かが悪かったからそうなったのだということではありません。子どもだけの問題が現れたということでもありません。長年にわたってつくられた家族関係のしわ寄せの結果と考えられます。

ですから子どもだけ、親だけを問題にするのではなく、家族のありようそのものに目を向けていく必要があり、家族間の相互作用に着目していくことが大切と考えられます。家族全体に援助の目を向け、関係の見直しをはかる援助となるようにしていくことです。

問題となって現れていることは、ある意味では家族関係を立て直す絶好のチャンスともとらえられるので、この機会をとらえて家族一人一人が本来の役割を見直したり、果たしたりしていくことなのです。このような視点は、悪者探しになって家族をいたずらに苦しめたりせずに、不登校を前向きにとらえられるものといえます。先生の援助の目を家族全体に向けていくことが大切と思われます。

(4) 遊びの大切さ

「うちの子はテレビゲームばかりしている。」
「学校を休んだのに友達とは遊んでいる。」

不登校の子を抱えた家庭では、学校に行かないで結構元気にしている子どもを見ていて親は困惑し嘆くばかりです。遊びは子どもたちの心の世界の表現だといえますが、一人遊びの中にも意味があるし、集団の中での遊びにも子どもの関係性を知る重要な手がかりがあると考えます。

不登校はどの子にも起こることだといえる現実の中で、家や学校での子どもたちの遊びに何を見い出していったらよいか考えていきたいと思います。

ア　心の解放としての遊び

子どもは心の成長をとげる過程でさまざまな課題に取り組んでいかなくてはなりません。成長の過程では、言語による表現がうまくできず、そのために心の世界の表現が遊びを通して可能となる場合が多いのです。子どもの内なる世界が遊びによって見えてきます。

まず、自分の内なる世界を遊びによって表現できたとき、子どもは傷ついた心を癒し、新たな心の世界の創造へと向かって行けます。内なる世界を作っていくための遊びに重要なことは、

① 心を素直に表現できるキャンパスや条件・環境が整っていること
（ここでは何をしてもよいという許しが得られること）

② 子どもの描くイメージや主体性を大切にすること
（何でも安心して表現できること）

③ 信頼できる立会人がいること
（誰かがそばにいて安心して遊べること）

などです。こういった中で、一人で自由に何でも表現できることが子どもの心の世界を解放させていきます。

内なる遊びの世界を自由に表現できて心の癒しが得られると、対人関係を含む遊びへと子どもの欲求は高まっていきます。子どもの出会いの場を遊びの中に見い出す時、３つの重要なポイントが浮かび上がってきます。

① 相手との言葉のやりとり
（言葉のキャッチボール）

② 体の表現でのコミュニケーション
（見つめあったり、手をつないだり、ボールをぶつけたり、体の触れ合いで相手を実感する）

③ 雰囲気づくり
（安心して遊べるよう空間を確保する）

この３つのポイントに留意して遊びを見直していくことが、対人関係を促す遊びとするために有効であるといえます。

仲間を求めて遊びが変化していくとき、子どもの心の解放も同時にとげられていきます。

イ　遊びの対応のポイント

① 親しくつきあい没頭すること

まず、学校のことなど忘れて、思いきり本気で子どもと遊ぶことです。子どもと本気でつきあう意志をはっきりさせること。中途半端な姿勢であっては、子どもは見抜きます。とにかく楽しく遊ぶことに徹します。

② 先入観を取り除くこと

おとなの側が先入観や常識にとらわれてしまうと、楽しく遊べません。子どもの関心にひきつけられ、一緒の世界に入っていこうとすることで子どもの内なる世界に一歩入っていけます。

③ 子どもの行為から学ぶこと

子どもの行為の意味がわからなかったり、馬鹿馬鹿しく思ったり、怒りたくなったり、滅茶苦茶としか思えなかったり、いろいろなことがありますが、そんな時こそ子どもの世界を理解するチャンスととらえて何かわからないけれど、意味のあるものとして肯定的にとらえる余裕があるとよいと思います。

④　つきあうことを持続すること

時間、場所、期間を設定して、継続して長くつきあうことです。自然なやりとりを大切にしてゆっくりと時を過ごすことです。あせって子どもを変えようとせず、変化をそのまま受けとめ子どもを信頼して待つことが大切なのです。

⑤　つきあいの枠を設定すること

ある期間、定期的に、決まった時間に決まった場所を設定しておくことはお互いの安心の中で心の変化をみていくことができます。

遊びの中で子どもが成長していくことの意味をしっかりとらえた先生と子どものかかわりが生み出す世界は、自己の世界から飛び出して仲間とかかわるすばらしい世界を子どもに約束するはずです。先生は遊びに徹して、仲間のいる世界への道案内役を果たしてください。

ウ　遊びの生み出すもの

自分の内的世界の構築ができた子どもは友達を求めます。しかしすでに遊ぶ空間と時間を失っている子どもにはテレビゲームで遊ぶことはできても対人関係を学ぶ遊びのチャンスは少ないといえます。

学校は、このような対人関係を含む遊びの空間と時間と人を提供できる数少ない場所であるともいえそうです。かつて子どもたちが持っていた遊びの空間を学校で体験しながら、遊びの中で子ども本来の姿を取り戻し、ごく自然に自分を表現して対人関係を豊かにさせていく可能性を学校はもっているということなのです。

学校は、受身的・一方的な遊びにしか身をおけなくなっている子どもたちを仲間との出会い・交流としての遊びへとつないでいく役目を果たす可能性をもっています。

先生の目は子どもたちの遊びの中でどんな関係性が見えてくるかに注がれるとよいと思います。一人で遊ぶ子や集団の中でのその子の役割などに注目すると教室では見えない子どもの新たな世界が見えてきます。子どもの中に対人関係がうまくつくれない子もいます。その子に応じた遊び方を教えていくことは上手に子ども集団に入って自分を表現することを可能にします。心の世界を表現できれば子どもは仲間との交流や自分自身の世界を臆せずに表現でき、自分の居場所を確認していけます。学校での居場所があれば子どもは安心して学校にいられます。

学校がそんなふうに子どもの居場所となっていくことがこれから大切だといえます。

また対人関係の不安を抱えた子にとって仲間の存在を感じられたり、仲間と一緒にいることの意味を知ることも大切なので、学校以外の場所でそのような経験をすることもよいことだといえます。

子どもが自分を表現し仲間の存在を感じられて、成長の足がかりとなっていく遊びの世界を学校という場面でとらえることは、不登校の子をもう一度学校に迎え入れるときでも、あるいは自分の居場所を感じられなくて悩む子にとっても大切な意味をもっています。

先生がその意味を理解し、子どもの世界を見ていく柔らかな目を持っていくことこそ、どの子に起こりうる不登校を解決していく一番の方策になると思います。